守るべき者、守られるべき者-攘夷戦争編-

鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守るべき者、守られるべき者ー攘夷戦争編ー

【Ｎコード】
Ｎ３１６８Ｚ

【作者名】
鈴

【あらすじ】
攘夷戦争、それは天人と侍の戦い。そこに最強と呼ばれた四人組が存在した。友情物語ー攘夷戦争編ー／十話以内に完結予定／不定期、気まぐれ更新／

一話　―傷―

――〝人〟と共に、〝人〟で在りなさい。

は、っと目が覚めた。見開いた瞳に写るのは古くさい天上。頬を伝って流れる汗をごしごしと袖で拭うと、かばっと上半身を起こした。

嗚呼、夢か。

はあっと深い溜め息を付き、立ち上がろうと腹に力を込めるとズキリと激痛が走る。

「――――…っ！」

激しい痛みに顔を歪ませ腹を右手で押さえた。強い痛みに目眩まで感じていた気がする。

暫し、そのままの態勢で居ると少しばかり痛みが引いてきた。とはいえ、動かなくとも感じる痛みは酷い程の激痛。

「あー……」

そういやァ、――

昨日、斬られたんだっけ。確か思い切り腹ァ、斬りやがったんだあのデカ天人コノヤローに。

基地に戻ると案の定、桂に激怒され、何故か辰馬には頭突きされ。

――高杉は、

覚えていない。辰馬に頭突きされたお陰で、ただでさえ大量に血を流してしまった為に起きた貧血が酷くなってしまい気を失った。

その時に、高杉は居なかった。…はず。あいつは独りが好きな野郎

だから、どこかへ行っていたのだろう。

「痛ェ……」

そう考えるうちによりいっそう増した痛み。心臓の鼓動の様にズキリズキリとテンポよく痛みが襲ってくる。

布団の上で、若干前屈みになりながら目をきつく絞め眉を寄せる。

「……――――――」

再度溜め息を付き、若干汗ばんでいる前髪を左手でかきあげれば気合いを入れ直した。

よし、っと心の中で掛け声を掛け、ゆっくりと傷口を庇いながら立ち上がる。

「あー……糖分不足」

フラフラとする足取りと、ハッキリしない意識は貧血のせいだと分かってはいるものの、糖分のせいにしてみた。

――――嗚呼、まだ眠ィ。

そんな事を考えながらのそのそと自室を出て、基地の門へと歩み始めた。

二話　ー空ー

チュンチュン、と二羽の小さな小鳥が地面で餌をくわえている。その餌は、銀時が門の上に寝そべりながら何となく、まいた米だった。

小鳥の鳴き声で今、朝なのだと知らされる。

「……――――」

平和なものだ、今、この時間は。争いの声も、血の臭いも叫び声も何も聞こえない。耳に届く音と言えば、小鳥の鳴き声と、さわさわと揺れる草木の音のみ。

ごろんとその場で横になり、今だ傷む傷口を擦った。先程、傷の具合をこの目で確認した。菌が傷口から侵入したのだろうか、傷の状態は悪化していた。

何も考える事もなく、曇っている曇天を見つめる。太陽などは隠れてしまっているその空を、ただただ見つめていた。

「金時ィー！」

鉛のある声で、空から地へと目線を移す。

「こげな所におったき！探したぜよー」

そう言いながら、坂本も門の屋根の上に登ってきた。坂本の格好は寝間着のままだ。それでもきちんと手に握られた一本の刀を腰にさしなおし、胡座をかいて座る。

なるべく腹に負担が掛からないようにゆっくり起きたがれば、銀色の髪の毛をわしゃわしゃと掻いた。

「怪我しちょるきに、動き回っちょったらイカン」

「あーはいはい、分かってますよ。ってか、テメェの頭突きのせいで尚更酷くなった気がするんスけどォ」

「いやァ、あん時はスマンのぅ…金時が怪我しゆうたって聞いたら、ちょいと焦ったんじゃ」

陽気な笑い声が静かなこの場所に響き渡った。全く悪気が無いような坂本の表情を見ていると、そんな事はもうどうでもよくなる。

「あっそ」

軽く返事を返すと、銀時は己の横に置いていた一本の刀を右手に持ち、立ち上がる。

辰馬が俺を探しに来たっつう事は、きっとヅラが俺を探しているのだろう。そうでなければこんな朝っぱらから辰馬が起きている訳がない。

くあ、とひとつ、欠伸を溢す。そして立ち上がり門の上から飛び降りた。着地時にズキリと激しい痛みに歯をくいしばりながらも声をもらしはしなかった。

傷が悪化している事実を知られては、己は戦に参加させてもらえないだろうから。

「んあ？何処行くんじゃあ？」

「ヅラん所」

右手に持っている刀を腰にさしては、そのまま歩き始める。

「ちょ、…ワシも行くき！待っとくれェ！」

銀時についていくように、刀を手に持つと、焦ったように門の屋根からジャンプをし地に降り立った。

じゃり、じゃり、っと地面を蹴りながら基地のなかへと入っていく。

寝たりない。
まだまだ寝れるが、ゆっくりもしていられない。もうじき、作戦隊長の桂が今回の戦の手順を、幹部を集め説明するだろう。

「はあ……」

本日数回目の溜め息。
怪我でダルいせいもあって溜め息を付く回数が多い。

「溜め息ばーしちょったら、幸せ逃げちゃうぞっ」

「うわっ…ちょ、辰馬！止めろってーの！」

えへっと効果音を付け、可愛らしさを表現したいのかウインクを数回し終わると、銀時の背後から抱きつきわしゃわしゃと銀色の髪の毛を荒らした。

べしっと坂本の手を叩き落とし、不意に見えた空に数秒間みいられる。

（――――青い、ムカつく程）

いつの間にか雲が空から去っていき、大きく、そして堂々と光を放つ太陽が空を飾っていた。

じゃり、先程よりも強く地面を蹴りながら歩く。

その青過ぎる綺麗な空に、それとは真逆な血で真っ赤に汚れきった己の魂が、更に汚れている様に見えて。

自然と、拒絶した。

――――〝人〟と共に、

先生、そんなの

――――〝人〟で在りなさい。

俺には無理だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3168z/

守るべき者、守られるべき者-攘夷戦争編-

2011年12月11日20時46分発行